

陳述書

世戸 玉枝

裁判長殿

私の家は、熊川断層がまっすぐ小浜湾の方に伸びて、活断層 F0-A、F0-B とつながる線の真下にあります。大飯原発はそれらを結ぶ線すれすれ西側にあります。大飯原発とわが家は7、8キロ離れていると思います。

私は、3.11以降、もし地震が来たら、県や国や関西電力からの情報を待つことなく、車が渋滞する前に、なるべく遠くまで車で逃げるべきだと思っています。地震が起きたとき、必ず制御棒が入って原発が止まるという保証はないのですから。何事毛なければ、帰ってこればいいだけです。

あのフクシマの事故は、県や国や電力会社は信用できない、避難勧告が出てからでは遅い、ということをお原の近くに住む私たちに教えてくれました。

フクシマで全電源が切れたと報道されたとき、いちばんに心配したのは福島原発地元の住民の避難です。住民を早く60キロ圏外に逃がさなくては、政府は何をしている、やきもきしながらテレビを見ていました。避難命令が出されたのは初めは3キロ圏内でした。爆発があつてからやっと、避難命令が出ました。こんなのおかしいでしょう？ 土砂崩れが起きてから避難させますか？ 堤防が決壊してから避難させますか？事故を小さく見せようとする魂胆がありあつてです。

しかも、後でわかつたことは、原発の立地でない町には、県からも国からも連絡がなく、町民は避難先を転々とし、結果的にしなくてもいい被曝をしてしまったことです。

集中立地の恐さも身に沁みました。三つの原発が次々爆発しました。あと一つは運転していなかったけれど、核燃料プールが壊れたら首都圏まで被害が及ぶ事態までになりました。

枝野官房長官が、連日「直ちに人体に影響はない」を繰り返しました。「直ちに」と言うことは「後々」はわからないということでしょう。なんという無責任。あの記者会見というか、政府発表というのか、ほんとうに不気味でした。あれだけの大事故です。「住民を避難させなくていいのか=海水をなぜ入れない」と怒号が飛んでもおかしくない状況なのに、粛々と行われているのに愕然としました。都会の記者たちは、電力は享受しているが、原子力のリスクには関心もなく、従つて事の重大さがわかつていないのだと怒りを覚えました。

私は、所属する新日本婦人の会で、5年前から子育て支援のサークルを始めて、たくさんの若いママ、かわいい子どもたちと仲良くなりました。そのときから私は、この子たちを核の被害から守るのが原発の地元に住む大人の責任と強く思うようになりました。

福島に行かれたお医者さんが見せてくれた一枚の写真が忘れられません。避難してきたお母さんが小さい男の子を抱っこして放射線量を測定している写真です。線量が多いので測り直している、そのお母さんの不安そうな顔が忘れられません。日本中のどのお母さんにも、もう絶対にこんな顔をさせたいけません。

原発はいったん事故が起きれば人間の力では収拾できないことが明らかになりました。原発を止めるには、そのことがわかった今しかない、フクシマの犠牲を無駄にしてはいけない、多くの入たちはこう思われたに違いありません。

小浜市議会は全国に先駆けて、原発からの脱却を全会一致で決議しました。これには多くの市民が感激しました。

一時は政府も原発依存をやめると言ったけれど、すぐに財界とアメリカが異議を唱えました。だけど私は、こんな状態で大飯原発が再稼働するなんて、信じられませんでした。小浜市の各家に、関西電力がパンフレットを配りました。それには、フクシマの事故は想定外の津波によるものと断定していました。原因を津波だけにすれば、おのずとその対策も限られたものになります。そして再稼働のための施策については、ほんとうに重要と思われる対策は、平成26年、27年度完成とあり、なんでこれが安全と言えるの?という内容でした。おおいの町では物々しい警戒と、金をふんだんに使って住民説明会が開かれました。私はその当日と翌日におおい町に入りました。説明会当日、私は街角で再稼働に反対しようとしてハンドマイクでしゃべっていました。私の前を一台の車が通り過ぎました。ふと見ると、運転している人がハンドルの上にカメラを置き、私の顔を写していきました。次の場所でも。まさに監視社会でした。住民説明会の次の日のおおい町は、これは同じ町か?と思うぐらい違っていました。街角でしゃべっている人たちの話題はすべて、昨晚の住民説明会のことでした。店に入っても、客が大きな声で「危ないものを子孫に残したらいかん」「昔のように貧乏に戻っても」としゃべっていました。説明会での勇気ある住民たちの一生懸命な発言が、町民を勇気づけたのです。おおい町民の本当の気持ちを知った思いです。

小浜市でも説明会がありました。これは立地でない自治体では初めてのことで、しかし、私たち一般の傍聴は許されませんでした。配られた資料はもらえましたが、その内容は、関西電力が配ったパンフレットとはほとんど同じでした。規制委員会の説明会なのに。そしてあわただしく大飯原発は再稼働されました。私たちは取り残されたような気持ちになりました。でも、官庁前での抗議行動にたくさんの人たちが集まり、たいへん勇気づけられました。

私たちは、福島の前線地にも行って見ました。福島第一から 10 キロ圏内の富岡町に入りました。地震のあった日そのままに、無人の街でした。駅も、商店街も誰もいない。私たちの町がこうならないと誰が断定できるでしょうか。フクシマの現実を見た私たちは、もし大飯原発で事故が起きたら、子どもたちに言い訳ができますか?できません。

そして、使用済み核燃料、つまり核のゴミが、若狭の原発に、ヒロシマ原爆の何千発分も置かれていること、それがもうすぐ満杯になっていきます。その圧迫感、子孫に残さざるを得ない苦しみ、それを理解していただけるでしょうか? 都会の人たちも、この核のゴミの圧迫感を想像してもらいたいと切に思います。

小浜市内の保育所に放射線検知器を貸与されたのはつい最近のことです。「これが異常を示したらどうしたらいいんですか?」と小浜市に聞くと、わからないということでした。また、「ヨウ素や防護服も配って、その使い方を訓練してほしい」と要望すると、「まだ県から何も書っていない」といわれたそうです。

いま、高浜とおおいには、再稼働に向けて、たくさんの労働者が集められ、宿泊所は満杯状態だといえます。労働者を乗せるバスも 27 号線にずらりと並んでいます。中で工事をしている労働者によると、金に飽かして突貫工事を進めているそうです。いくら金をかけても電気料金に上乗せするからかまわないのだと言っています。再稼働のためなら、人もお金も使うのです。

ところが、フクシマの収束には、人手もお金も渋っています。バルブの締め間違いという初歩的なミスで基準の 380 万倍の汚染水が漏れたのはついこの間のことです。除染も進まず、その期限を 3 年延ばしました。

再稼働には熱心だが、事故収束にはおごりな国の姿勢があからさま過ぎます。こんな状態で再稼働するのは正気の沙汰だとは思えません。目先の利益より、これからの子どもたちの命を守ることが、大人の責任です。

2014 年 3 月 5 日